平成２６年度東京都広報コンクール

実　施　結　果

平成２６年度東京都広報コンクール実施状況

区市町村の広報力の向上と、都と区市町村との連携による広報活動の充実を図ることを目的に、平成２６年度東京都広報コンクールを下記のとおり実施した。

１　応募状況

（１）応募作品数

部門	応募作品数（今年度）	応募作品数（昨年度）
広報紙部門　区市部	３６	３３
広報紙部門　町村部	３	２
写真部門　　一枚写真の部	２０	１６
写真部門　　組み写真の部	１３	１２
映像部門	２１	１７
応募総数	９３	８０

（２）応募区市町村数

４０区市町村（２２区・１５市・３町村）

※昨年度　３５区市町村（１９区・１４市・２町村）

２　審査会

平成２７年１月２６日（月曜日）及び同年１月２８日（水曜日）

東京都庁舎内会議室

３　審査委員

「平成２６年度東京都広報コンクール審査委員名簿」のとおり（２ページ）

４　審査結果

「平成２６年度東京都広報コンクール入選作品一覧」のとおり（３ページ）

なお、（社）日本広報協会「全国広報コンクール応募要領」の応募基準に該当する各部門の上位の作品については、「平成２７年全国広報コンクール」に東京都推薦作品として応募する。

５　表彰式

平成２７年３月２６日（木）

平成26年度東京都広報コンクール応募作品審査委員名簿

部門	氏名	現職等	専門分野
広報紙	大井眞二	日本大学法学部新聞学科教授	マス・コミュニケーション論等
	長岡光弘	グラフィックデザイナー（株式会社たきホールディングス）	広報紙のレイアウト編集等
写真	大石芳野	㈳日本写真家協会会員 フォト・ジャーナリスト	写真一般
	板橋秀樹	東京都生活文化局 広報広聴部広報課写真担当係長	行政広報写真等
映像	関　裕敏	電通クリエーティブ・ディレクションセンター 専任局長エグゼクティブ・クリエーティブ・ディレクター	広告企画・制作
	高橋幸作	(株)NHKエデュケーショナル 特集文化部統括プロデューサー	映像企画・制作

平成26年度東京都広報コンクール入選作品一覧

部門		賞	区市町村名	作品名	全国推薦
1 広報紙（39）	（1）区市部（21区15市） （2）町村部（3町）	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」11月1日号	○
		一席	台東区	「広報たいとう」12月5日号	○
		二席	杉並区	「広報すぎなみ」3月11日号	
			練馬区	「ねりま区報」11月21日号	
2 写真（33）	（1）一枚写真の部（11区6市3町）	最優秀	八王子市	「広報はちおうじ」1月1日号	○
		一席	瑞穂町	「広報みずほ」9月1日号	
		二席	葛飾区	「広報かつしか」10月25日号	
			日の出町	「広報日の出」8月1日号	
	（2）組み写真の部（10区1市2町）	最優秀	足立区	「あだち広報」12月10日号	○
		一席	八王子市	「広報はちおうじ」5月1日号	
		二席	該当なし	−	
3 映像（18区3市）		最優秀	足立区	リフレッシュオープン！生物園へ行こう！	○
		一席	江東区	モノづくり魂	
		二席	墨田区	自分たちのまちは　自分たちで守る　～あなたも仲間に消防団～	
			江戸川区	えどがわ区民ニュース　平成26年5月1日号特集 未来へつなぐまちづくり　～江戸川区の土地区画整理事業～	（非会員）

＊表中（ ）内の数字は応募作品数。
＊全国推薦は、入選作品のうち、全国広報コンクール応募要領の応募基準に該当する各部門の上位作品とする。

広　報　紙　部　門

〈広報紙部門　総評〉

●大井委員

広報紙を取り巻く環境、特にメディア環境はこの 10 年間激変した。すぐ思いつくのはソーシャルメディアの著しい発展である。職業柄若者の情報行動を身近なところでよく見る。例えば授業の光景はまったく様変わりした。例えば情報検索行動である。授業中彼らに聞きなれない用語(専門用語を含め)を呟いたとする。とたんに彼らはお好みの検索エンジンをフル稼働させて、検索に励む。評者の授業はかなりデジタル化しており、ほぼペーパーレスで進行する。授業の資料はイントラネットの授業フォルダに貼り付けてあるから、大半の受講生は、授業前にアクセスして自分の PC やスマホにダウンロードして臨む。時には黒板代わりに PC のスクリーンを映し出して板書をする。彼らはスマホをスクリーンに向けてカメラでパシャリ。ゼミの学生間の連絡はいまでは大抵 LINE ですます。

少し専門的な言い方をすると、彼らの情報行動の基本はマスメディアを含めた様々なメディアの相互参照である。新聞を読む（あまり読まない)、テレビを見る（あまり見なくなった)、ここで彼らのアンテナにひっかかったトピックを、彼らはさまざまなネットのメディアに縦横に移動して、必要な情報を入手し相互に参照する（この逆も当然ある)。そこで彼らの行動は終わらない。それらの情報を加工したりして、ツウィッターに発信し、フェースブックにアップする。面白い動画（自作を含め）があればユーチューブに投稿する。彼らはもう立派な prosumer である（producer + consumer）なのである。

きりがないのでここら辺でやめることにする。要は、若者だけでなく現代人のメディア・情報環境は激変し、そうした大きな変化の中に「広報紙」が置かれているのである。Prosumer の注目を引きつけるべく、様々なメディアが激しく競い合っているのである。広報紙にとって容易ならざる時代がやってきた。新聞の目を覆うような凋落振りを見よ。

こうしたメディア環境の変化は、広報紙にどんな問題や課題を突きつけるのか。改めて広報紙の存在理由が問われる時代になった。そのことを踏まえて、広報紙の制作にあたってどのような態度で臨むべきかについて、いくつか日ごろ考えていることを披瀝することにしたい。

第一に、デジタル・デバイドの存在である。デジタル化の恩恵は総ての人が平等に享受するわけではなく、ガラケーすら持たない人びとがまだかなりいる、という事実である。彼らの存在を忘れてはならない。行政情報だけでなく、生活情報を広報紙に頼り、時には切り抜いて冷蔵庫に貼る。種類に応じてゴミを収集場所に出すために、回収の曜日をチェックする。急な発熱で休日の診療の医者を探す。もちろんネットで済ます人は多いかもしれないが、確実に広報紙に依存する人も存在するのである。それを忘れてはならないだろう。

第二に、メディア間の情報の相互参照が進むと、オーディエンスの側でのメディアの情報の参照の仕方が重要になるが、忘れてならないのは、その情報の信頼性である。ニュースや情報の信頼性の研究は日本ではあまり進んでいないが、これまでの研究を総括すると

〈広報紙部門　総評〉

情報源がカギとなる。人は口頭の情報よりも活字の情報を信用する。活字は公信力をもつ。口頭の情報には半信半疑でも、活字になるとそう簡単に否定はできない。特に諸外国と比べると日本では公的情報源の信頼性が非常に高いのが特徴である。そこまで信用していいのと半畳を入れたくなるが、事実なのである。広報紙にとって情報の正確性が重要なのは言うまでもないが、それが信頼性につながっていること心すべきである。頼りにされている、信頼されている、もっと自信を持っていい。

第三に、メディア特性の話になるが、今日なお大きな力を持つ放送メディアは、フローのメディアであって、ストックのメディアではない。録画機器や媒体が飛躍的に安くなったとしても、オンデマンドが流行っているといっても、その情報はそう簡単にストックにはならないのである。放送メディアがフローとして流す情報とは、そのままでは情報の固定性を欠くのである。現在の「形」で新聞が生き残るとは思えないが、活字媒体としての価値は依然として残るし、残さざるを得ない。同じことは広報紙にも言えるのであって、紙ではなくなるかもしれないが、広報「紙」の価値はなくならないのである。そうした存在をラストリゾートという。最後のよりどころぐらいの意味である。活字経由の情報はまさに激変期にあるが、「活字的なもの」はなくならないと思い定めて、住民に何をどのように伝えるかを検討するのは自治体にとって重要な課題であろう。その意味で活字メディアの特性を改めて問い直す必要があろう。足元をいろいろな角度から見直さねばならないだろう。

審査を終えてこんな感慨がよぎるのも、限られたスタッフや予算にもかかわらず、斬新な企画、記事のシャープな切り口、文章表現やレイアウトなど、いろいろと創意工夫を凝らしたことが伺える多くの作品に出合ったからである。広報パーソンの皆様に敬意を表したい。

〈広報紙部門　総評〉

●長岡委員

広報紙の閲読向上を図るために

媒体特性を活かした編集企画に、更なる磨きをかけたい。

コンクールへの応募作は 39 作品であった。企画内容は、2020 年度開催の東京オリンピック決定を受けスポーツ係る特集企画を多く目にした。また、発行号の月を考慮した、防災係る企画、夏休みのイベント企画等が目についた。その意味で、情報を発信するタイミングを重視しニュース性に飛んだ特集企画と言える。一方、住民が紙面に登場する企画も多く見受けられ、行政と住民とのコミュニケーションメディアとして広報紙の機能が浸透している。

編集面では、ダイレクト訴求型の情報告知が多く見受けられるが、一方で、住民に問いかける見出し、インパクトを持たせるための感嘆符を用いた見出し等、住民に読んで頂くための見出しの工夫を紙面から感じる。また、住民へのインタビュー記事も多く見受けられ、変化の飛んだ紙面編集を見て取れる。

紙面表現では、ほとんどの応募作で可読性を重視したレイアウト表現が施されている。広報紙における住民とのコミュニケーション主体は文字情報である。その観点から、可読性を考慮した文字組に、紙面表現のスキルの向上を見て取れる。また、紙面のビジュアルに多くの写真を用いている。写真のシチュエーションも、かつて多く見受けられたスナップ写真から、事前に企画意図を考慮しシチュエーションを考え撮影された写真を紙面で多く見受けられた。その意味で、写真撮影のスキル向上とともにインパクトのある視覚表現力を紙面から感じる。

女性の社会進出が進み、各世帯における生活環境が年々変化している。住民の様々な生活環境に対応する意味で行政の広報活動には、広報紙と WEB が切り離せない基幹ディアとなっている。広報紙で WEB の広報を行い、WEB で広報紙の広報を行う双方の情報発信が、行政の様々な情報を住民に認知を図るためにますます求められよう。また、広報紙の媒体特性である記録性と保存性、手に取ってじっくりと読める等を考慮した紙面企画がいま以上に求められよう。その意味で、今回の応募作に見受けられた防災関連の紙面企画は、媒体特性に合致した紙面企画の一例と言える。住民とのコミュニケーションメディアを踏襲しつつ、広報担当者は紙メディアの媒体特性を活かした企画に更なる磨きをかけ、住民に広報紙を読んで保存していただく情報発信を心がけたい。なお、今回の入選作と選外にもれた差は、僅差であった事を付け加えたい。

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

最優秀

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ 平成２６年１１月１日号
発行部数	２８万部
年間発行回数	２４回
判型・平均ページ数	Ａ４判・１６ページ
担当者数	９人（専任９人、兼任０人）
意図	誰にでも訪れる「人生の最期」。今号では「終末期医療」をテーマに、市民の皆さんの「生き方」、そして「逝き方」を考えるきっかけとなるような特集を掲載した。 亡くなる方の約8割が病院死。しかし、本市が実施したアンケート調査によると、「自宅で最期を過ごしたい」との回答が約4割にも上った。 そこで特集では、「在宅療養」にスポットを当て紹介。在宅看取りの経験者やサポートする現場の声を掲載し、一つの選択肢としてもらえるよう紙面を構成した。 取材を通して、在宅療養を支える家族などの「絆」を感じ、表紙は温かな笑顔の写真を掲載。納得できる最期を迎えるため、“大切な人”と話し合ってもらいたいと願いを込めた。
審査委員コメント	●冊子型の判型を活かした、読ませる工夫がちりばめられた作品。「終末期医療」は、商業雑誌なみの特集になるかと期待したせいもあって、やや不満が残る。さらにもう１面を割いて、行政の対応を扱ったらどうだろうか。他の紙面も充実しており、読み応えのある、また読みやすい作品に仕上がった。（大井） ●特集は、住民のアンケート調査、末期医療のいま、在宅看取り等、編集のロジックがしっかりとしている。また、専門家のインタビュー記事が、住民に訴求力のある紙面編集。一方、写真の中に表示された文字の可読性に注意したい。他の紙面は、市政インフォメーションをはじめ、訴求情報を紙面ごとに集約し、住民に分かりやすい情報構成である。（長岡）

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

広報紙部門　最優秀　八王子市　広報はちおうじ　平成26年11月1日号

皆さんと市政をつなぐコミュニケーション情報紙
広報 はちおうじ
public relations
Hachioji
11.1
2014(平成26年)
No. 1314
特集 終末期医療
自分らしい"いき方"
ヘルパー・社会福祉士などに囲まれる、石山ハルイさん(73歳・写真中央)。「自宅で最期を迎えたい」と在宅療養を決断されました。皆さんは人生の最期について考えたことはありますか。

市長コラム

八王子市長
石森孝志（たかゆき）

在宅療養のさらなる充実に向けて

毎年9月の「敬老の日」には、その年に百歳となられる方のご自宅に、私自ら、長寿のお祝いの品をお届けしており、今年は3名のお宅にお伺いしました。どなたも大変お元気で、ご家族に祝福され、喜ばれているお姿が印象的でした。

地域の行事などへお招きいただき、市民の皆様とお会いするたび、"元気高齢者"の方々が広くご活躍されていることを実感しております。市では、こうした方々の社会参加と地域貢献を奨励するとともに、生きがいづくりにつなげていただけるよう、市内の特別養護老人ホームや高齢者世帯などでもボランティア活動を行っていただいております。

しかし、いかに元気に活動されている方たちであれ、年齢を重ねるにつれ、病気のリスクが高まることは避けようもなく、入院となる場合も。病院で亡くなられる方が約8割となっている中、4割の方は在宅での看取りをご希望されており、終焉の地を自ら選択できる態勢づくりが必要であると認識しております。

誰もがいつかは迎える最期の時。「住み慣れた"終の棲家"で過ごし、ご家族に看取られたい」との思いにお応えできるよう、医療機関や訪問介護の方々との連携を一層強化し、在宅療養のさらなる充実に力を尽くしてまいります。

平成27年4月誕生　中核市八王子

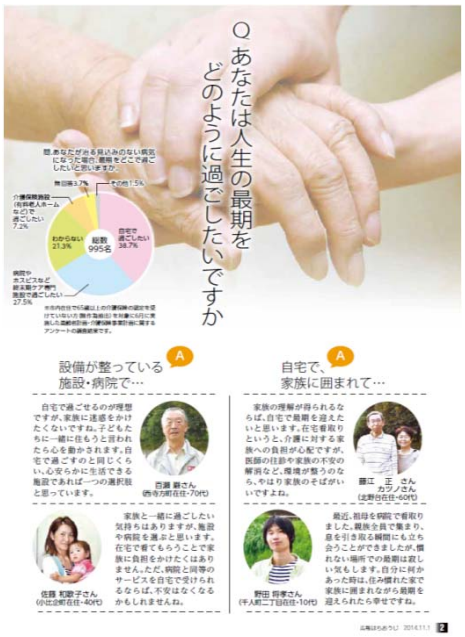
終末期医療のいま

皆さんは「終末期医療」をご存知ですか。これは、人生の終末期において、自分で最期の過ごし方を選択できるよう支援するものです。延命治療ではなく、人生の質を重視した身体的・精神的緩和ケアを中心に行います。
理想の最期とは――終末期医療のいまを探ります。

最期を自分で選択できる時代に

清瀬会記念病院
理事長・横山 隆徳さん

プロフィール


Q あなたは人生の最期をどのように過ごしたいですか

設備が整っている施設・病院で…

自宅で、家族に囲まれて…

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

第一席

区市町村名	台東区
広報紙名・掲載号	広報たいとう　平成２６年１２月５日号
発行部数	１００，３００部
年間発行回数	２４回
判型・平均ページ数	タブロイド判・８ページ（応募号は１０ページ）
担当者数	４人（専任３人、兼任１人）
意図	七福神めぐりは、元日から7日までに行うことが望ましいとされているため、周知期間も含めた約1か月前にあたる12月5日号の１面及び挿込み面（表面・裏面）で特集。 １面では、七福神のイラストを大きく入れることによりインパクトを持たせ、視覚的に魅力のある紙面構成に努めた。このほか、今回挿込み面にて初めての取り組み（下記参照）を行っているため、挿込み面の利用方法を簡単に解説。また、ボランティアガイド利用方法の周知を図ることにより、自分たちだけで巡ることが不安な方にも対応できるようにした。 挿込み面では、初めての取り組みとして、広報紙から抜き取り、かつ、三つ折りにして利用できるよう工夫した。三つ折りにすることにより、3コースのうち、周りたいコースだけの情報とマップを見ながら、コンパクトに持ち運ぶことができる。 表面では、「台東区観光ボランティアガイドさんに聞きました！台東区の七福神」として、常日頃から区内をガイドしているボランティアガイドからの見どころを掲載することにより、より深く魅力的な広報を可能とした。 裏面では、「たいとう七福神めぐりマップ」として、各コースごとのマップを各寺社の写真付きで掲載した。
審査委員コメント	●応募作は12月5日号。特集「七福神を巡ってみませんか」は翌年正月を狙った企画ということが分かる。こうした先取りの記事は広報紙にとって重要な企画であり、常日頃心がけたい。実際の紙面展開だが、ボランティアガイドを活用した流れが非常によくできていて、読み応えのある作品に仕上がった。（大井） ●１面とインサートの別刷りは、発行月を考慮したグッドタイミングな企画である。また、紙面編集も、楽しいイラスト、MAPと写真、住民ボランティアのガイド紹介と、住民参画の紙面となっている。他の紙面は、行政情報とお知らせ情報で本文組を変え、住民に視覚的に情報の違いを訴求している。４色の用い方も適切である。（長岡）

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

広報紙部門　第一席　台東区　広報たいとう　平成26年12月5日号

平成26年(2014)No.1122
12/5
毎月5・20日発行

広報 たいとう

区の世帯と人口(11月1日現在)
住民登録　前月比
世帯数　109,804（+297）
人口　189,911（+306）

発行　台東区　編集　総務部区長・広報室　〒110－8615 台東区東上野4丁目5番6号
☎ 5246－1111(代表)　FAX 5246－1029(区長・広報室)　ホームページアドレス　http://www.city.taito.lg.jp/

台東区の七福神を巡ってみませんか

七福神めぐりとは、その年の開運招福・家内安全等を願い、七福神をまつる神社・寺院を巡ることをいいます。寺社により異なりますが、特にお正月（元日～7日）に巡ると良いとされています。
皆さんも、台東区の七福神を巡ってみませんか。

弁財(才)天
インド伝来で、七福神唯一の女神。愛敬を示し、音楽、弁舌、智、芸術の神様です。子孫繁栄や恋愛にも吉をもたらします。

毘沙門天
インドの神様で、多聞天とも呼ばれます。左手に持つ宝塔は福をもたらし、右手の鉾（ほこ）には邪を払う魔除けの力があり、財産と勇気を授けます。

恵比寿(須)
唯一の日本生まれで、医業、造酒、漁業、商売繁盛をつかさどるといわれ、「えびす顔」と例えられるように尊顔の神様です。

寿老人(神)
不老長寿の神様で、中国の老子の化身の神ともいわれています。諸病平癒の神でもあり、人々の安全と健康を守ります。

布袋尊
中国の神様で、布袋和尚として親しまれ、堪忍と和合を教えてくれます。家庭円満に恵まれます。

福禄寿
中国の神様で、中国道教の理想である幸福、俸禄の意味を持ち、長寿や家内安全をもたらします。

大黒天
大国主命といわれ、有徳、財宝、五穀豊穣の神様で、福食をつかさどります。

挿込み面で七福神めぐりを特集しています

台東区観光ボランティアガイドの方にお聞きした七福神がまつられた寺社の特徴やコースごとのマップなどを掲載しています。七福神を巡る際にご活用ください。
また、下記のステップ①・②のように、抜き取って利用することができ、▼で3つ折りにすると、見たいコースのみを見ながらコンパクトに持ち運ぶことができます。

ステップ① 抜き取る！
ステップ② 折りたたむ！

台東区観光ボランティアガイドをご利用ください

台東区観光ボランティアガイドは、七福神コースを無料で案内しています。ぜひご利用ください。
※12月27日(土)～27年1月3日(土)はお休みです。1月4日(日)は午後1時から利用できます。
※正月の時期の各寺社の御朱印受付について、ガイドや地は利用できませんので、ご了承ください。

▷対象　2人以上のグループ・団体
▷利用時間　午前10時～午後4時の間で1コース2時間以内
▷申込方法　申込書（下記ホームページからダウンロード可）に記入し、ファックスで下記問合せ先へ
▷申込締切日　希望日の10日前
▷問合せ　台東区観光ボランティアガイド事務局（土・日曜日・祝日・年末年始・第2・4水曜日午後を除く、午前10時～午後4時）
☎（3842）5599　FAX（6673）3046
URL http://www.taitouboragai.com/

ご利用をお待ちしています！

▲台東区観光ボランティアガイド　堀越さん

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

第二席

区市町村名	杉並区
広報紙名・掲載号	広報すぎなみ　平成２６年3月１１日号
発行部数	１８７，６００部
年間発行回数	３６回
判型・平均ページ数	タブロイド判・１２ページ
担当者数	５人（専任５人、兼任０人）
意図	東日本大震災から３年が経過し、震災の教訓を風化させないためにも、首都直下地震は必ず来るという認識に立って改めて震災対策の必要性を広く区民のみなさんに確認していただくために震災対策を特集した。 １面は、いざという時のために日ごろから家族でできる取り組みを内容とし、２面１１面は、区の防災対策への理解を深めてもらい、地域防災設備などを再確認してもらうことを目的とした見開きのイラストマップとした。マップは、災害発生時の町の様子とし、区の防災対策に合わせて防災に関わる数字を落としこむなど具体性を持せた。また、区公式キャラクターを探しだし震災救援所まで一緒にたどるなど、家族全員で震災時を想定した行動を意識する契機となることを意図して紙面を作成した。
審査委員コメント	●１、2そして11面の「地震、その時、あなたはどこにいますか？」は、３/１１東日本大震災を生きた教訓にする視点が活かされた秀逸な特集企画になった。特に２、１１面の見開きは、派生したり、関連したりする事象や問題への目配りが行き届いていて、充実した紙面に仕上がっている。（大井） ●４面を用いた特集の防災は、いざという時に役にたつ情報が整理し編集されている。住民に訴求力のある紙面である。また、広報紙メディアの特徴を踏まえた保存版としての企画である。他の紙面は、訴求情報でレイアウトを変化させ、飽きのこない紙面表現である。また、囲み罫を上手に用いて、情報の視覚的な整理が施されている。（長岡）

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

広報紙部門　第二席　杉並区　広報すぎなみ　平成26年3月11日号

広報 SUGINAMI すぎなみ

毎月1日・11日・21日発行

3/11 NO.2122

主な記事

ご存じですか　ひとり親家庭等子育て支援……2

「次世代育成基金」への寄附をお願いします……3

倒れにくく、燃えにくいまちづくりを推進します……12

南相馬市への支援と復興状況……12

支えあい共につくる　安全で活力あるみどりの住宅都市　杉並

区の代表電話　☎3312-2111

地震から、自分と家族を守るために

3月11日は、わが国に未曽有の被害と悲しみをもたらした東日本大震災の記憶を風化させず、教訓として語り継ぐ日です。4年前の出来事を思い出し、各家庭や職場、学校で、災害時の行動ルールを再確認し、自助・共助の取り組みを進めましょう。区も、防災・減災対策に力を注ぎ続けます。一緒に、安全・安心を実感できるまちをつくっていきましょう。　──問い合わせは、防災課へ。

37.8%　家具の転倒防止対策をしている＝37.8％※

大地震では、テレビが飛び、タンスが倒れかかってくることがあります。転倒防止器具を使って、家具類を固定し、寝室やよく居る場所には大型家具を置かないようにしましょう。

45.2%　家族との連絡方法や待ち合わせ場所の確認をしている＝45.2％※

災害用伝言ダイヤル「171」、各携帯電話事業者の提供する「災害用伝言板サービス」で、家族の安否確認をできるようにしておきましょう。

●NTT災害用伝言ダイヤルの使用方法

1 → 171 → 2

伝言の録音　伝言の再生

自宅の電話番号をダイヤルします。

60.3%　非常用食料・飲料水を用意している＝60.3％※

地震発生直後は電気・ガス・水道などのライフラインが停止する恐れがあります。

非常用食料・飲料水・応急医薬品などを、最低3日分を準備し、定期的に中身を確認しましょう。

区では、非常用食料・飲料水、家具の転倒防止器具などのあっせんを行っています。詳細は、防災課へ。

自助　自分の身は自分で守る

66カ所　震災救援所＝66カ所

区は、震度5強以上の地震が起きた際に、被災した住民の避難、救援活動を実施する拠点として区立小中学校等に震災救援所を開設します。また、震災救援所は、震災救援所運営連絡会（町会・自治会、防災会、PTA、学校、区などのメンバー）が運営し、毎年訓練を実施しています。近くの震災救援所とその役割を確認しましょう。

共助　地域や身近にいる人同士が助け合う

3万5093人　防災訓練に参加した人数＝3万5093人

「平成26年版　防災白書」によると、阪神・淡路大震災では約8割の方が、家族や近所の住民等によって救出されました。

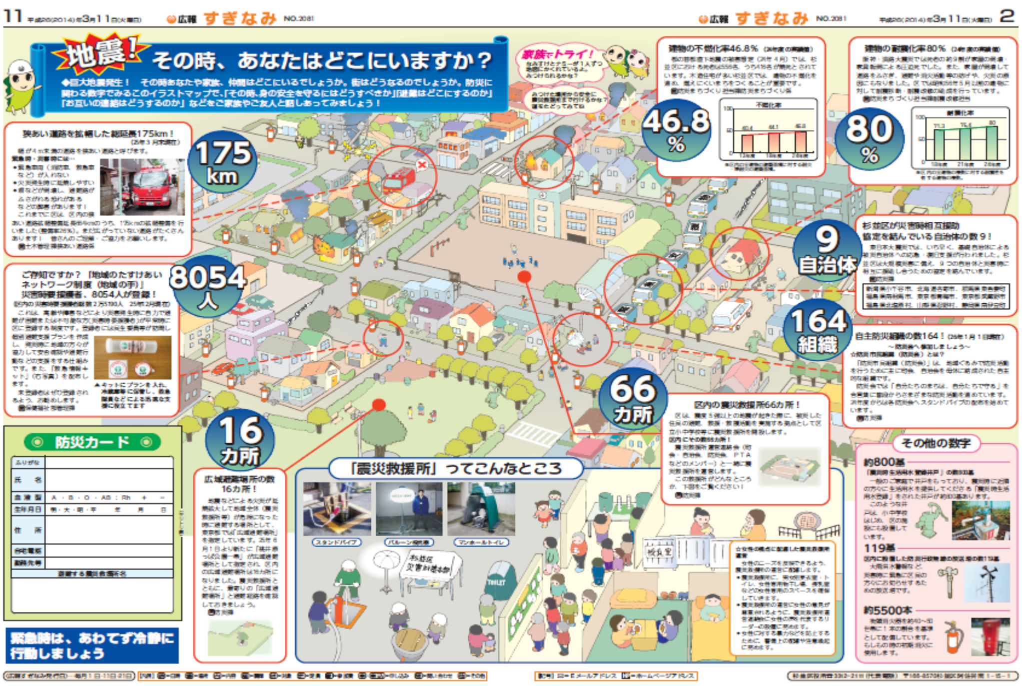
地域ぐるみで防災活動を行うための防災市民組織（防災会）が、主に区内各地の町会・自治会を母体に164組織あります。各種防災訓練も実施していますので、ぜひ、ご参加ください。

※数値は第45回杉並区区民意向調査より引用。

あの日の想いを忘れずに 継続して南相馬支援を！

杉並区長　田中 良

本日（3月11日）午前11時に、シェイクアウト訓練（自主参加型一斉防災訓練）を行います


11　平成26(2014)年3月11日(火曜日)　広報 すぎなみ NO.2081

地震！ その時、あなたはどこにいますか？

◆巨大地震発生！　その時あなたや家族、仲間はどこにいるでしょうか。街はどうなるのでしょうか。防災に関わる数字でみるこのイラストマップで、「その時、身の安全を守るにはどうすべきか」「避難はどこにするのか」「お互いの連絡はどうするのか」などをご家族やご友人と話しあってみましょう！

家族でトライ！

175km　狭あい道路を拡幅した総延長175km！

8054人　ご存知ですか？「地域のたすけあいネットワーク制度（地域の手）」災害時要援護者、8054人が登録！

16カ所　広域避難場所の数16カ所！

46.8%　建物の不燃化率46.8％

80%　建物の耐震化率80％

9自治体　杉並区が災害時相互援助協定を結んでいる自治体の数9！

164組織　自主防災組織の数164！

66カ所　区内の震災救援所66カ所！

「震災救援所」ってこんなところ

スタンドパイプ　バルーン投光機　マンホールトイレ

その他の数字

約800基

119基

約5500本

防災カード

ふりがな	
氏名	
血液型	A・B・O・AB：Rh ＋ －
生年月日	明・大・昭・平　年　月　日
住所	
自宅電話	
連絡先等	
避難する震災救援所名	

緊急時は、あわてず冷静に行動しましょう

広報 すぎなみ NO.2081　平成26(2014)年3月11日(火曜日)　2

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

第二席

区市町村名	練馬区
広報紙名・掲載号	ねりま区報 平成２６年１１月２１日号
発行部数	２４５，０００部
年間発行回数	３６回
判型・平均ページ数	タブロイド判・９．１ページ（１１月２１日号は８ページ）
担当者数	５人（専任５人、兼任０人）
意図	特集記事のテーマは、安全・安心の地域づくりである。子どもと高齢者の課題を中心に取材・作成した。 １面「地域の安全。防ごう！火災」 地域ぐるみの防犯・防火活動の取り組みを、実際に活動している区民の様子を写真で伝えることにより、師走を控えて、地域での防犯・防火意識の高揚を狙った。 ２面「子どもを見守る地域の目を増やそう」 全国各地で、幼い子供が犯罪に巻き込まれる事件が発生している。当区においても昨年6月に、集団下校中の区立小学生が、刃物を持った男に切りつけられるという痛ましい事件が発生した。この事件を契機に、子どもたちの安全を守るための組織を立ち上げた地域の人々の活動を、インタビュー形式で紹介することで、子どもを守る地域活動に参加を呼びかけることを目的とした。 ３面「今一度、住宅の防火対策を！」 火災が発生しやすい時期をむかえ、住宅火災で犠牲になる高齢者が多いことから、高齢者向けの防火対策を区内消防署の職員インタビューで紹介した。また、消防器具の点検や消防団の活動にも触れ、防火活動を身近に感じられるように構成した。
審査委員コメント	●トップの「守ろう！地域の安全　防ごう！火災」と連動する２，３面の防犯・防火の特集記事は、それぞれ担当者を前に出したパーソナルなタッチが説得力を増している。意図的かどうかは分からないが、８面の災害時ペットはどうなるの、と合わせてみると一層興味深い。目配りがよく効いた紙面に仕上がった。（大井） ●防犯・防火の紙面は、扉紙面の１面、防犯の２面、防火の３面と、編集の視覚的な流れが考慮され住民に訴求力のある台割が施されている。また、リードを上手に活用し情報内容が分かりやすい編集である。写真・イラスト・グラフ等のビジュアル素材の活用が、訴求力の向上に寄与している。お知らせ紙面も充実している。（長岡）

平成26年度東京都広報コンクール　広報紙部門　入選作品

広報紙部門　第二席　練馬区　ねりま区報　平成26年11月21日号

写　真　部　門

〈写真部門　総評〉

●大石委員

一言で表すと、「一年間の成果として評価してほしい」という意気込みを感じるものが少なかったことが残念でした。

例えば、せっかく良く撮れている写真をあまりにも小さく掲載するなど、写真を一枚一枚見ると、頑張って撮影されていると感じるものが多いだけに、非常にもったいないと感じる作品が多く見られました。写真の技術も大事ですが、撮影した写真を、他人が見て「良い」「面白い」と思われるような形で活かすことも重要です。そう思わせるような写真の使い方が、今回の募集作品にあまり見られなかったことは残念です。

また撮影者と被写体のコミュニケーションがうまく取れていないと、表情などに違和感が出てしまいます。被写体を漫然と撮れば良いというわけではなく、撮影すべき背景があり、それが絵としてにじみ出た瞬間にシャッターを切るということが重要です。

組み写真については、「組み写真」そのものに対する考え方が弱いと感じました。写真を複数枚掲載しただけでは組み写真とは言えません。ストーリー性を出すためには、レイアウトを工夫することで、読者の気持ちを揺さぶり、見ているだけで想像を掻き立てる工夫が必要です。

●板橋委員

まず一枚写真についてですが、全体としては、写真の質は驚くほど向上していると思います。一般の方をモデルにした写真も増えてきましたが、表情、構図等で不自然さが感じられるものもありました。モデルさんと良くコミュニケーションをとり、自然な表情を引き出す努力を期待します。特に表紙の写真は、読者の方の目に止まりやすい写真はどのようなものなのか、手に取ってもらうにはどのような写真が良いのかを考えて撮影をすると、より効果的です。また写真の上に文字を乗せる場合は、テキストのサイズやフォントなど、写真を引き立たせる事も考えて頂きたいと思います。

組み写真についても、全体的に昨年よりよくなっていますが、組み写真として成功しているのは 2 組のみでした。応募された作品中のいくつかは、少し工夫をすれば組み写真として表現できるものもあったので、頑張っていただきたいと思います。組み写真は、複数の写真でストーリーを作り、表現するものです。テーマを決めて、主となる写真を軸として、クローズアップ等のイメージ写真を織り交ぜながら、読者の方に何かを感じていただけるような構成を作っていただきたいと思います。

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

最優秀

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ　平成２６年１月１日号
意図	1月1日号で掲載した、農業特集の表紙写真。 都内随一の農業生産高を誇る八王子市。しかし一方で後継者不足や耕地面積の減少など、深刻な問題を抱えている。農業の活性化を図るため、本市の現状や取り組み、携わる人々を紹介し、市民に「八王子の農業」を意識してもらえるような特集をめざした。 この写真は、八王子で最も収穫量の多いダイコンの収穫体験に同行し撮影したもの。大きなダイコンに悪戦苦闘した直後の、達成感と疲労感が入り混じった男の子の表情を撮影し、収穫の喜びを表現した。農業について取り上げた本号を手にとってもらうきっかけになればと思い、表紙に採用した。
審査委員コメント	●いかにもうれしそうな男の子の表情がおさめられており、一年間の成果を感じる。通常なら顔に影がかかるのは良くないが、葉っぱの形が面白く活かされている。（大石） ●1年間の成果がよく伝わって来ます。少年の表情も豊かで、収穫した大根を高々と持ち上げているシーンも良いですね。八王子市は、広報誌内に写真を効果的に使用していると思います。（板橋）

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

一枚写真の部　最優秀　八王子市　広報はちおうじ　平成26年1月1日号

市長コラム

八王子市長
石森孝志

活力ある自立都市の実現に向けて

新年あけましておめでとうございます。

昨年本市は、基本構想・基本計画「八王子ビジョン2022」に基づき、新たな10年のスタートを切りました。市民の皆様のお力添えを頂きながら、活力ある自立都市の実現に向けて、盛頭な滑り出しができたものと自負いたしております。

具体的には、懸案であった圏央道八王子西インターチェンジのフル機能化が、平成27年度中の実現に向け大きく前進、JR八王子駅北口マルベリーブリッジ延伸工事についても、いよいよ本年3月に完成の運びとなりました。これら基盤整備の推進が、地域経済のさらなる活性化へつながっていくものと確信しております。

一方、平成27年4月を目標として準備を進めている中核市移行につきましては、過日、東京都の同意をいただき、いよいよ総務大臣への申入れを行うこととなります。移行を契機に、八王子の地域特性を活かした「ワンランク上のまちづくり」を進めていく所存です。

豊かな自然や伝統文化をはじめ、さまざまな資源と魅力に恵まれている八王子市。協働のパートナーである市民の皆様に、このまちの住民であることを誇りに思っていただけるよう、「多摩のリーディングシティ」にふさわしいまちづくりに、本年も全力で取り組んでまいります。

※今号は8・9ページの間に 中核市移行準備特集号、男女共同参画情報紙「ばれっと」を折り込んでいます。

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

第一席

区市町村名	瑞穂町
広報紙名・掲載号	広報みずほ　平成２６年９月１日号
意図	この写真は、８月に瑞穂町の「松原中央公園」で撮影しました。照りつける太陽、濃緑の樹木や芝生、どこまでも続く青空と積雲…。公園には、残暑厳しい晩夏の光景が広がっていました。 その中で、ふと、水辺で子どもたちがはしゃいでいる姿が目にとまりました。水しぶきをあげて気持ちよさそうに遊んでいる子どもたち。見ていると、なんだか私まで涼しくなってきた気がしました。まだ残暑の厳しい９月の広報紙で、住民の皆さんに「涼」を感じてほしい一心で、そのシーンを写真に収めました。 ９月はまだ猛暑が続く夏の気候ですが、子どもたちにとっての夏は８月で終わりです。９月号の表紙は、編集当初より、にぎやかな真夏とは違う「風景部分は広く、人物は小さくかつ少人数の写真」をイメージしていました。 「子どもたちの夏の記憶」をテーマに写真選びをし、日焼け跡の残る健康的な子どもたちが、残り少ない夏を精一杯楽しんでいる姿が、今号のテーマにふさわしいと、表紙写真に決めました。 なお、この広報が発行されると、ホームページの「松原中央公園の水辺」のページへのアクセス件数が大きく増え、多くの住民の皆さんに、この水辺を知っていただくきっかけにもなりました。
審査委員コメント	●水が映えており、「暑さの中に求める涼しさ」がよく感じられる。縦位置の構図が絶妙であり、写真単体で見ても良い出来である。（大石） ●良い構図で撮られています。晴れ渡った青空、広い公園、涼しげな水場と夏の要素がぎっしり詰まって、夏の暑さを感じます。掲載後多くの読者からの反響があったのは広報誌として成功していると思います。（板橋）

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

一枚写真の部　第一席　瑞穂町　広報みずほ　平成26年9月1日号

涼

どこまでも続く青と白のコントラスト、ほとばしる水しぶき。残暑を和らげる「涼」はいかがでしょう。

秋原中央公園では、暑い夏の間、子どもたちが水遊びできる水場がご利用いただけます。ぜひお越しください。

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

第二席

区市町村名	葛飾区
広報紙名・掲載号	広報かつしか　平成２６年１０月２５日号
意図	児童虐待防止推進月間テーマにあわせ、「子どもたちからのＳＯＳにいち早く気付いてほしい」「子どもたちが悲しむことないように見守ってほしい」などのメッセージを込め、幼い女の子のアップを掲載した。
審査委員コメント	●広報紙としては躊躇しがちな、児童虐待というテーマを敢えて取り上げた意識の高さを評価したい。写真単体では、光の具合が少々のっぺりした印象を受ける。（大石） ●扱い方が難しい児童虐待のテーマに対して、正面から向き合い撮影したのは評価できます。子供の視線がずれているのも効果的で、不安定な子供の心情がよく表現されていると思います。トリミングの仕方も良いですね。（板橋）

第二席

区市町村名	日の出町
広報紙名・掲載号	広報日の出　平成２６年８月１日号
意図	この写真は、平成26年７月に町内農家さんがトマト栽培を行うビニールハウス内で撮影しました。 掲載意図は、２月の大雪で大きな被害を受けた農家さんが、猛暑の中農業を営み、私たちの食卓へ新鮮野菜を届けてくれているということを町民に伝えるとともに、農家を応援する意図もあり掲載しました。
審査委員コメント	●表情に不自然さが無く、被写体とのコミュニケーションがよく取れていることがわかる。発色も良い。掲載時にトリミングを工夫し、もう少し奥行を出せればなお良かった。（大石） ●オレンジ色のTシャツが効果的。背景が緑色なので、トマトとシャツの色が画面中央で存在感を出しています。表情も良いですね。籠の中のトマトのボリュームがもう少しあっても良かったと思います。（板橋）

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

一枚写真の部　第二席葛飾区　広報かつしか　平成26年10月25日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（一枚写真の部）入選作品

一枚写真の部　第二席　日の出町　広報日の出　平成26年8月1日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）入選作品

最優秀

区市町村名	足立区
広報紙名・掲載号	あだち広報　平成２６年１２月１０日号
意図	種々の「郷土芸能」には、比較的年齢層の高い方が担うというイメージがある。しかし意外にも、その現場には多くの子どもたちの活躍があった。 足立区には、登録されているだけでも33のお囃子などの団体が存在する。しかし、音を聞いたことはあってもしっかりと見たことがあるという人はそう多くはない。 今回は練習などを4カ月にわたり取材した。そこで感じた「郷土芸能の現場に子どもたちがいる驚き」「子どもたちの生き生きとした表情」など、見ることで初めて伝わる印象を大切にしたかったため、組み写真の構成を選んだ。 練習から本番の流れに気をつけ、文章を読む方向と写真の時系列をなるべく合わせるようにした。文章に集中していても、目の端に映る写真からその文章に合った情景を感じられるようにできればと考えた。 写真選びについても、寄り・引き、ハイ・ロー、場面的な偏りなどに注意し、見ていて飽きさせないことに意識をおいた。 練習場所や本番の会場など、暗い場所での撮影が多くなってしまったため、全体的に明るめの補正をかけた。子どもの持つ活発さと、伝統的な文化の持つ趣を損なわないように注意した。 発行日より、「練習を見てみたい」「子どもにやらせたい」などの反響があった。お囃子全般への興味を生むような内容にできたと思う。
審査委員コメント	●長期間の努力がにじむ力作。写真の組み方がうまく、一目でストーリーが浮かび上がる、本当の意味での「組み写真」である。一枚一枚も工夫してよく撮影されており、色調も良い。（大石） ●力作ですね。一枚一枚、丁寧に撮影されています。取材期間も四か月間と長く、一つのテーマをよく考えながら構成されています。レイアウトも良いですね。流れるように見れる紙面構成とストーリーが伝わるように考えられています。レイアウト上では、一枚一枚の写真の大きさにもう少し強弱があっても良いかも知れません。取り上げたテーマも良く、組み写真をよく理解した作品です。（板橋）

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）　入選作品

組み写真の部　最優秀　足立区　あだち広報　平成26年12月10日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）　入選作品

組み写真の部　最優秀　足立区　あだち広報　平成26年12月10日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）　入選作品

組み写真の部　最優秀　足立区　あだち広報　平成26年12月10日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）入選作品

第一席

区市町村名	八王子市
広報紙名・掲載号	広報はちおうじ　平成２６年５月１日号
意図	豊かな自然に恵まれている八王子。四季折々の風景の中でも特にサクラは見る者を魅了する。また、サクラは春の訪れを告げ、新たなスタートを迎える人々を祝福するかのように咲き誇る。今号では、春色に包まれたまちなかの風景に自然とこぼれた「笑顔」を切り取った。 仲睦まじいカップルや進級を喜びはしゃぐ親子、友達と仲良く遊ぶ子どもなど、その人の人生の一ページが刻まれた最高の瞬間を掲載することで、読者に春の思い出やサクラを見たときの感動を思い返してもらえるような紙面をめざした。 レイアウトは、メインテーマである「笑顔」を引き立たせるため、写真解説は左下にまとめ、紙面を開いた際に写真が最初に目に入るよう工夫した。
審査委員コメント	●テーマに適合する写真を、桜の開花時期という短期間でよくそろえたものだと感心する作品。全体を眺めただけで桜をめぐる人々の喜びが伝わってくる、素晴らしい見開きとなっている。（大石） ●桜をテーマに、人々の笑顔をとらえた良い写真で組み合わされています。一番大きく使用されている、子供たちの写真も良いですね。レイアウト的には、もう少し写真の大きさに変化をつけて、遠近感のある写真を組み合わせても良かったのではないかと思います。（板橋）

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）　入選作品

組み写真の部　第一席　八王子市　広報はちおうじ　平成26年5月1日号

平成26年度東京都広報コンクール　写真部門（組み写真の部）　入選作品

組み写真の部　第一席　八王子市　広報はちおうじ　平成26年5月1日号

映　像　部　門

〈映像部門　総評〉

●関委員

今回はなかなか優劣つけがたい作品群でした。例年通りテーマを絞ったドキュメント的なものと広報レギュラー番組的なものを同じ土俵で審査するのは難しいですが、方向性は違ってもクォリティーの比較はできるという気持ちで審査に取り組ませていただきました。かつてはオンエア機会がテレビのみで、その回数も限られていたため、作品が目に触れることも少なく、モチベーションが持ちにくかったかもしれませんが、昨今はネット、YouTubeなどにアップされる前提ともなり、新たなモチベーション向上につながってきているように感じられます。他の地域の作品（番組）との比較もされやすく全体的にクォリティーが上がってきているのではないでしょうか。

また、キャスターを立てた広報ニュース形式のレギュラー番組が増えていて、各地域似たような構成で制作されています。更新も頻繁となり、速報性を重視すれば、一本一本のクォリティー、作品性は多少、目をつぶることになりがちなのでルーティーン化しないよう注意したいところです。同じテーマを伝えるとしても、その構成によって伝わり方が全く変わってきます。映像にナレーションだけでいくのか、キャスター、ナビゲーターがいたほうが良いのかいなくていいのか、組み合わせたほうが飽きないのか、音楽はどのようなものを当てるか、無いほうが良いのか、映像はどのアングルのほうが伝わるか、検討する部分は山ほどあります。こういう番組はだいたいこんなもんだろうとか、予算を考えればこの程度の音楽だろうとか思い込まないで、もっと良くならないかという気持ちを持ち続けていただきたいと思います。特に今回感じたのは、音楽が安易につけられているということです。著作権フリーの電子音的なものは便利ですが、そればかり聞かされていると薄っぺらな情報に感じられてきます。いっそ、無いほうが…というケースも多々ありました。

上記の検討ポイントを無意識のうちに吟味し、いかに人の気持ちにまで届くかにこだわるのが映像作りのプロです。そんな視点で採点させていただきました。

〈映像部門　総評〉

●高橋委員

26 年度の各番組・作品を拝見しました。今年の番組は一言でいうならば「粒ぞろい」です。採点についても同様に高低差の無い拮抗した評価になりました。私の感想としても、数年前からハード面の進歩もあるのでしょうが、上質な映像と手際の良い編集、明快なリポートとナレーションでつくられた番組が多く、ネット配信、CA-TV 放送に十分に耐えられるものになって来ていると思いました。

しかし、見ていて何か物足りないものも感じました。それは、広報・情報番組(一部番組ではドキュメンタリー部分もありましたが)としては十全であっても、情報が溢れれば溢れるほど、その情報から疎外される人たちも増えてくるという側面を感じたからです。せっかくのお役立ちの情報や区や市の施設情報も、見る側に関心をよばなければ「私には関係無い・・」「自分には得にならない・・」と思って横を向いてしまう人も出てくるでしょう。

番組の持つチカラというものは、そんな「情報」に興味も何ももたない人たちを、その時点からどう番組に惹きつけることができるか、ということだと思います。情報の情をとって「人情」を使う演出もあるでしょうし、お約束のゆるキャラや可愛い動物や子供を前面に出して、とりあえず気を惹く手もあります。しかし、あくまでそれは見せ方のアイデアであって、肝心なのは中身の「情報」をどう下味をつけ、料理して盛り付け、食べやすく食欲の湧くような番組にしていくか、ということだと思います。今回「粒ぞろい」といったのは、情報という素材の料理の仕方が良くも悪くもみな体裁が似ていて、情報をそのままナマに近い形で番組に出しているのでは、と感じたからです。

「粒ぞろい」などと言いながら逆の意味で少し皮肉っぽくなってしまいましたが、物足りなさを感じたのはそこのポイントです。情報なのだから手を加えずにそのまま出せばいい、という考え方もあるでしょう。しかし、誰に向けて、何のために番組を作っているのでしょう？区民や市民に必要と思われる情報を伝えて、生活の役に立ててもらったり、災害を防止したり、健康を維持したりしてもらいたいからではないでしょうか？であれば、とにかく見てもらわなければならないのです。ですからナマにちかい情報を出して、見たい人だけが見ればそれで良し、とするのは如何なものかと思うのです。

情報番組であればこそ高度な演出が必要だ、というのが私の結論です。今回私が高評価を付けたのは足立区の生物園を紹介する番組で、実に情報と演出がうまくかみ合っていて、知らず知らずのうちに番組の中に導かれていきました。そんな演出を感じさせない、上質な演出の情報番組をこれからも期待したいと思います。

平成26年度東京都広報コンクール　映像部門　入選作品

最優秀

区市町村名	足立区
題名	リフレッシュオープン！生物園へ行こう！
時間・制作方法	１５分・委託制作
主な内容	自然の生きものたちとの貴重な「ふれあいの場」として親しまれてきた足立区生物園。改修工事のための休園を経て、ついに平成２６年４月、リフレッシュオープン。 新しい展示内容になった大水槽をはじめ、動物たちとのふれあいなど生物園をより楽しむためのポイントを紹介します。
制作意図	制作にあたり、「自然の生き物について楽しく学べる」と「世代を問わず楽しめる」の２つのＰＲポイントを中心に番組を構成しました。 【ＰＲポイント１「自然の生き物について楽しく学べる」】 生物園は、自然の生き物とふれあえるコーナーがたくさんあります。例えば、展示コーナー。トンネルをくぐり抜けた先の飼育槽中心部にドーム型の観察空間をつくり、動物を間近に観察できるようになっています。このほか、小動物へのエサやり体験、15種類・600頭の蝶が舞う大温室で、羽化したばかりの蝶を放す体験、生物園の裏側を見学できるバックヤードツアーなど、生き物とふれあえるコーナーを通して生物園の魅力が伝わる構成にしました。 【ＰＲポイント２　「世代を問わず楽しめる」】 生物園は展示内容や企画などが充実し、様々な年代の方に楽しんでいただける施設です。展示コーナーやふれあい体験を通して、子どもはもちろん、大人もつい夢中になってしまう生物園の魅力に迫りました。
審査委員コメント	●リフレッシュした足立区生物園。詳しい説明は女性ナレーター、体験レポートはタレント親子が案内人の女性と見どころを説明してもらいながらめぐる構成でコンパクトに園の楽しさを紹介している。生き物に大接近できる新しい工夫がたくさんあり興奮する子供の様子が微笑ましい。都会の子供たちにとって間近に生き物を見たり触れたりできるというのはありがたい。表に展示されたものだけでなく、バックヤードまで見学できるというのがうれしい。ゆるキャラ３人はシュールだが子供たちをひきつける効果はありそう。（関） ●自然と生き物たちと触れ合う「ふれあいの場」として親しまれてきた「足立区生物園」。２６年四月に大水槽の改装なども済み、リフレッシュオープンした。番組では「Wコロン」の木曽さんちゅう親子がコンビを組み、園内やバックヤードを案内する構成である。園内ではエサやり体験の外、蝶を羽化後に放す体験、小動物の目線の高さで観察できるドームなど盛り沢山の「ふれあい」が待っている。老若男女、世代を問わず楽しめる施設であり、大人でもつい夢中になってしまう。親子コンビの息の合い方は絶妙で、これを見た人は、子供を是非連れて行ってみたいと思うのは間違いない。（高橋）

平成26年度東京都広報コンクール　映像部門　入選作品

平成26年度東京都広報コンクール　映像部門　入選作品

第一席

区市町村名	江東区
題名	モノづくり魂
時間・制作方法	１５分・委託制作
主な内容	江東区東雲にある、昭和３２年に創業した老舗の佃煮店「佃宝」（つくほう）。厳選された国産の素材のみを使用する、添加物を一切使用しない、全て手作りで行うなど、創業者である先代の教えを守り、こだわりある製造を現在も行っている。お客さまに安心して食べてもらえる、おいしい佃煮作りについて、製造工場に密着取材を行い、従業員のみなさんのインタビューを交えながら、こだわりの製造の様子を紹介する。
制作意図	江東区内で良い製品・商品を製造している会社は数多くある。それらの会社を実際に取材し、こだわりや取り組みなどを映像で紹介することにより、普段感じることのないものづくりに対する思いを広く伝える。さらには、区内にあるこだわりの製法・製品を紹介し、区民に地域に対する誇りを感じてもらい、地域に愛着を持ってもらうことを目的に制作した。
審査委員コメント	●老舗佃煮店のこだわりの製品づくりの舞台裏。クラッシックピアノのＢＧＭ、現場の音、丁寧な撮影で手間暇かけた手作業の素晴らしさが伝わってきた。とびぬけて美しい映像は「いいものの紹介はいい映像が大事」と改めて感じさせる。区内に数ある老舗を紹介し、地域に誇りと愛着を持って欲しいという目的は達成されている。（関） ●シリーズ名「モノづくり魂」というタイトルで、各回一社を紹介していく情報番組の中のドキュメント。　江東区東雲に有る佃煮店「佃宝」。昭和32年創業で、素材を吟味、添加物不使用、全工程手作り、など創業者から受け継いだこだわりの製法で老舗の名を不動にしている。番組ではその苦労して守っている製造法から、従業員のインタビューまで丁寧に的確に構成されていて、モノづくりの魂が伝わってくる。ただ、同業他社がある中で、この一社だけに絞った理由が分かりづらく、部外者のリポーターを使うなどの方法も模索してもよかった。（高橋）

平成26年度東京都広報コンクール 映像部門 入選作品

第二席

区市町村名	墨田区
題名	自分たちのまちは　自分たちで守る ～あなたも仲間に消防団～
時間・制作方法	１５分・委託制作
主な内容	１　プロローグ＝　人情味あふれた下町すみだの人々の日常。このかけがえのない“人”、そして“まち”の日常を万一の災害から守るため存在しているのが、地域防災の要である「消防団」。しかし、全国的に、高齢化等で団員不足が続いている。そのため、平成25年に消防団員の加入促進を強化する「消防団等充実強化法」が成立した。 ２　消防団とは＝まず、消防団とは何か、役割・入団資格などを、本所消防署の若手職員・小田倉麻理奈さんが、わかりやすく紹介。 ３　自分たちでまちを守る人々の存在＝仕事や学業、家事などに従事しながら、自分たちのまちを自分たちの手で守りたいと考えて活動する消防団員の“日常”を紹介 ① 藤工芸職人の祖父・父・娘（孫）と三代続く、消防団員、大学生の小峰愛理さん。活動拠点は東京スカイツリーの足元。 ② 仕事と家事そして、消防団員を両立させる母にあこがれ、母を超えたいと入団した高校生18歳の息子、坂口雄大さん。弟二人も少年消防団員。地域の祭りで神輿を担ぐ子どもたちの警戒もする。 ③ 消防団員募集のポスターを見て団員になった大学生、飯嶋かおりさんと、あたたかく受け入れる分団長たち。実働訓練の様子。 ４　エピローグ＝消防団員は特別な人がなる訳ではないというメッセージを、日常生活の姿と消防団の活動姿の両方を紹介することで伝え、「あなたも消防団員の仲間になりませんか」と呼びかける。
制作意図	古くからの木造住宅が密集し、地震や火災発生時には大きな被害が想定されている墨田区。区では防災施策を最重要課題として取り組んでいるが、なんといっても、地域を支えるのは、まず、そこで暮らす人々。私たちが暮らす地域の防災リーダーが、地域の消防団であり、消防団は地域の人々の大切な「日常」を守るために大きな役割を果たしている。 しかし、地域防災の中核である消防団は昨今、団員の高齢化・団員不足という大きな課題を抱えている。全国的にも問題となっており、昨年、「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」（消防団等充実強化法）が成立。墨田区でも、若い地域住民の消防団への参加促進が切望されている。 そこで、今回の特集番組では、若い消防団員の日常生活や団員としての想いを紹介しながら、彼らを取り巻く家庭や先輩団員たちとの交流・ふれあいを通じて、消防団の存在と役割などをつづった。 そのことにより、視聴者が消防団を身近に感じ、魅力や関心を抱くような内容に仕上げた。このすみだという地域に住んで良かった、こういった若者たちが地域を守っている、自分も参加してみようと思ってもらえるように製作した。
審査委員コメント	●地域防災の要である消防団。万一の災害に本署消防署と連携して活動する組織だが高齢化で存続厳しくなっているとのこと。祖父から３世代が消防団員。母の姿に憧れた息子たち、募集ポスターを見て入団した女子大生などのリアルな声をひろい、活動の意義深さを伝えている。ラストで「あなたも消防団員の仲間になりませんか！」と３人がそれぞれ語りかけ敬礼する演出が清々しい。（関） ●テーマはズバリ「消防団」。人情味あふれる下町の生活を、地域防災の面から支えているのが「消防団」である。消防団に馴染みが無い人にも分かるように、まず「消防団」とは何か、役割や入団資格などを若手消防署職員が説明し、現実に仕事や学業、家事などに従事しながらも入団して、実働訓練などの活動している人たちの日常をインタビューをまじえて追う。自分たちのまちを自分たちで守りたい、という意識の人たちは意外なほど多いが、実際に入団する者は少ない。団員の高齢化が進む中、番組では最後に「あなたも消防団員の仲間になりませんか」と呼びかける。　テーマが一本に絞られていて明解な番組になった。（高橋）

平成26年度東京都広報コンクール　映像部門　入選作品

第二席

区市町村名	江戸川区
題名	えどがわ区民ニュース 平成26年5月1日号特集 未来へつなぐまちづくり ～江戸川区の土地区画整理事業～
時間・制作方法	２４分・委託制作
主な内容	平成２６年３月末、区内に残る最後の区画整理組合が45年に及ぶ事業の末解散し、事務所の跡地に公園が完成した。その事業完了の象徴とも言える公園に、たわわに果実を実らせた夏みかんの木がある。この木は区画整理で移植され、事業と共に成長してきた。 木の記憶に事業の進展を重ね、江戸川区の区画整理事業のうち事業面積が大きい葛西地区に注目し、その取り組みの内容や事業に関わった地域住民の思いを紐解く。
制作意図	今回の番組は、1. まちづくりの基礎を成した大事業である区画整理事業の歩みを知ってもらうこと、2. 多くの知恵と努力が現在の便利で安全なまちを創ったことを広く知ってもらい、古くからの住民、区画整理の事を知らない新住民、それぞれにまちへの愛着や誇りを高めてもらうこと、3. まちづくりの歴史を未来にのこすこと、4. 区のまちづくり事業への理解を促すこと、以上４点を目的に制作しました。固めの話題であるため、わかりやすく親しみやすい演出をこころがけ、クァッドコプターによる空撮など新しい撮影手法も取り入れ、番組の訴求力や魅力が高まるよう努めました。 区内の区画整理事業の多くは昭和40年代にスタートしています。 初期の頃から事業の中核に関わり内容をよく知る方は、多くが既にお亡くなりになっており、ご健在の方も高齢になられています。 そうした状況から、今が区内の区画整理の歴史について当事者の思いをライブで織り込みつつ番組制作ができる最後の時期にあたると思われ、江戸川区にとり意義ある番組になったと感じています。
審査委員コメント	●　江戸川区の区画整理事業を振り返り、未来に向けて更なる課題に取り組む決意で結ぶ。沿岸部と内陸部それぞれ江戸川区ならではの苦難の歴史は、その克服の過酷さを痛感させられる。それだけに完成した現在の緑と水辺の憩いの区域、整備された道路、駅前の姿は輝いて見える。街ぐるみの区画整理に伴って移植された４０年前からあった公園の夏ミカンの木の語りというひと工夫が情感を醸し出している。（関） ●江戸川区の葛西地区に焦点を合わせ、４５年に及んだ区画整理事業の完成までの苦労と今後の更なる取り組みを番組化した。区民にまちづくりの基礎である「区画整理事業」とは何か？ということから丁寧にその歴史を紐解き、事業の中核にいた現在なおご健在の当事者の証言も得て骨太の番組になった。地勢的な表現にクアッドコプターを用いるなど、映像も充実している。区画整理の象徴ともいえる公園の「夏みかんの木」の見た目、という語り口も効果的だった。（高橋）